

国際シンポジウム／ワークショップ 開催挨拶

## 京都大学地域研究統合情報センター と地域研究

林 行夫(京都大学地域研究統合情報センター長)

Yukio Hayashi (Center for Integrated Area Studies, Kyoto University)



プーハバ。こんにちは。みなさま、はじめまして。京都大学地域研究統合情報センター長の林です。このアチェにおいて、本日より6日間にわたる国際ワークショップの場に居合わせることができたことを、まことに光栄かつ心より嬉しく思います。この会議を準備し、共催支援してくださいました国立シアクアラ大学津波防災研究センター(TDMRC)やJICA、および内外の関係者の皆様に心より感謝しつつお礼申しあげます。開会の辞としまして、わたしも地域研究統合情報センター(地域研)の概要紹介と地域研究について、簡単に述べさせていただきます。

地域研は、2006年4月、京都大学に全国共同利用施設として設置されました。設立6年目の若い研究所です。昨年度から、文部科学省より共同利用・共同研究拠点と認定されました。さまざまな地域研究を進める日本国内の研究関連機関との共同・協力を促進し、地域研究の発展に寄与することを目的として創設されたきわめてユニークな組織です。普通、地域研究の研究所には、国名や文化、政治、地理的範囲を示す名称がつきますが、地域研にはそれがありません。

現在、教授、准教授、助教からなる教員13名が、「地域相関」、「地域情報資源」、「高次情報処理(地域情報学)」のいずれかの研究部門に属して、専門の研究分野や地域を横断する研究、情報学の手法を応用した地域の情報の共有化を進めています。組織の名に特定地域がないのはそうした理由からです。とはいえ、教員には各自専門とする地域や情報学のような専門分野があります。地域の範囲は、東アジア、中央アジア、東南アジア、南米ですが、スタッフは個々の経験的研究を軸に、特定地域の専門家間で流通・消費されるにとどまらず、地域を横断するテーマで地域研究の新たなあり方や手法を具体的な形にしていこうとしています。その意味では、世界でも類をみない、新時代の研究施設といえましょう。

地域研は、地域や専門を横断するために、公募でユニークな仕組みの共同研究を推進しています。同時に、「英国議会資料」の整備に始まる地域情報資源の共有化を進め、内外の研究組織の協力を得て、システム開発と共有化のプラットフォームを公開してきました。

また、全国の地域研究関連組織の連携に貢献しています。2004年発足の「地域研究コンソーシアム」(JCAS)の事務局を担い、その活動を全国加盟組織と協力しつつ推進してきました。週間頻度で「地域研究メールマガジン」(日本語)を配信し、地域研究関連のシンポジウムや研究会の案内、JCASと関連組織のプロジェクトや公募情報も発信しています。加盟組織は現在93にのぼり、共催・支援した研究活動や集会の数は100を越えます。

昨年度より、地域研は、相関型地域研究と情報学を両輪とする研究をかたちにするべく、5年計画でセンター内に「地域情報学プロジェクト」を発足させました。内外の教員の研究、共同研究などで長らく蓄積されてきたデータを情報学の手法でとりまとめ、2011年度を迎えた現在、地域研独自の地域情報学の成果を国内外に公開・発信しつつあります。まさに、本日より始まる災害マッピングもその重要な成果のひとつです。海外では記念すべき初の公開になります。

このように地域研は、公募による学際的な研究交流を深化させるとともに、データベースの構築と公開、共有化システムの試行と公開を推進してきましたが、今年3月11日に東日本大震災が発生しました。地域研は、災害復興への地域研究の関わりから、今回の災害マッピングの創案者にしてリーダーである

---

西芳実博士と山本博之博士を中心に内外で研究成果を公開するとともに、原正一郎博士が情報共有の観点からデータベースを肩代わりするなど、被災地支援のために新たな公募研究をたてて貢献しようとしていました。

東日本大震災は、原発事故をふくめ、多くのかけがえのない人々の生命と地域の暮らし場とその風景を奪い、国内と世界に大きな悲しみとともに様々な問題を投げかけました。アチェの皆様には、身をもってこのことを了解していただけることと存じます。その尊い犠牲のうえにたち、人と人との繋がりとは何か、協同とは、共生とは何か、そして地域とはいかなるものであるのかが根源的に問われています。

ロシアの文学者の言葉に、「幸せの色は誰にとっても同じだが、悲しみや苦しみの色は人それぞれである」というのがあります。人との関わりと特定地域を軸とする地域研究には、危機的な状況が広まった現在でこそ、伝えるべきメッセージと果たすべき役割があります。アチェと日本で起こったことは、世界が共有すべきことなのです。

ある地域での事象を比較しつつ、課題や問題点を浮き彫りにし、解決にむけて貢献しようとすることは、今そして近未来の地域研究に必要な態度であろうと心得ます。地域研究の成果は一研究者や学界に止まらず、研究対象地域に還元されなくてはなりません。今回のワークショップは地域研の研究活動の一端ではありますが、国立シアクアラ大学津波防災研究センターと地域研との学術交流協定締結も織り込むことで、今後の友好はもちろん、そうした研究協力関係が継続されていくことを切望しております。

繰り返しになりますが、地域研究の原点は個別の地域を生き、グローバルな地域を築き、地域にさまざまなかたちで関わる人びととの相互作用にあります。今回の国際ワークショップが、設置後5年を経た地域研そのひとつの重要な成果として生まれたことを強調しつつ、本日より、みなさんと活発な議論が密になされることを願ってやみません。